

日本列島への騎馬文化導入とその展開

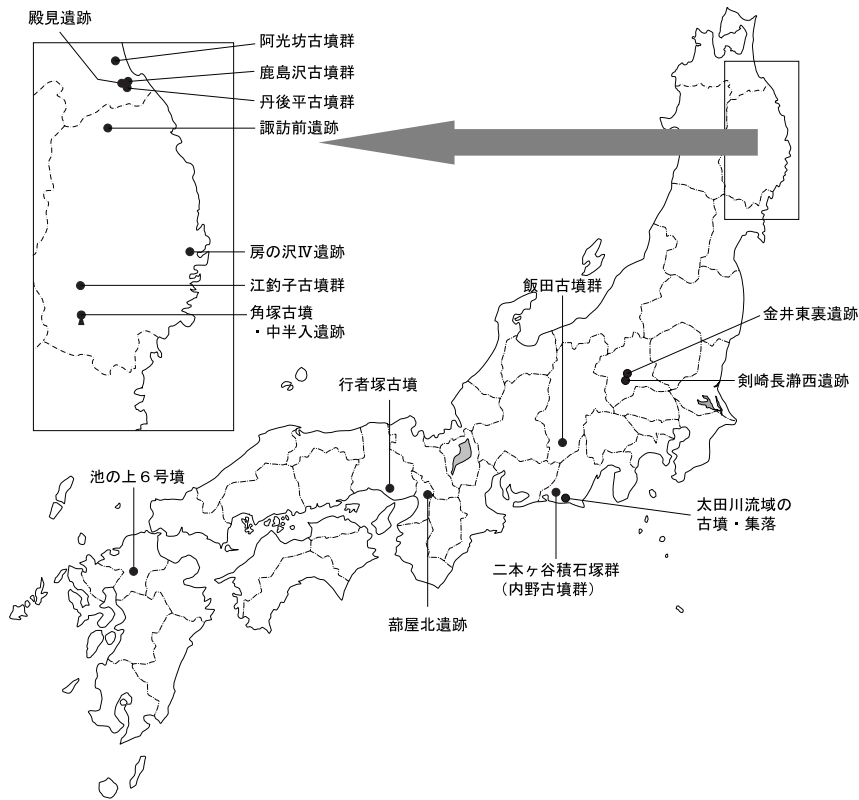
—東日本を中心に—

堀 哲郎

1. はじめに

人類と馬との出会いは古く、約15000年前に描かれたとされるラスコー洞窟壁画にも登場している。最初は狩猟の対象であったが、やがて人々はこれを動力として利用するようになった。馬の利用によって情報伝達速度は飛躍的に上がり、荷物の運搬や農耕でも活躍するなど人類の発展を大いに助けた。また、時には戦場を駆け巡る最強の兵器でもあった。人類が馬を利用するようになってからしばらく経った頃、人々はいつしか馬を飾るようになった。特に高貴な人物の馬は豪華な馬具によって装飾された。馬具を構成する材質は、鉄だけでなく、金や銀、銅といった金属に加え木や革、骨、繊維、宝石など多種多様な材質で構成されている。つまり、馬具には様々な分野の技術が結集されているといえ、特に古代においてはこれが顕著である。このように馬と馬具の研究から得られる情報量は非常に大きく、また、日本列島の馬と馬具製作技術は古墳時代に朝鮮半島からもたらされた可能性が極めて高いことから、日本列島における技術史や国際交流を語る上で欠かせないものの一つであるといえる。

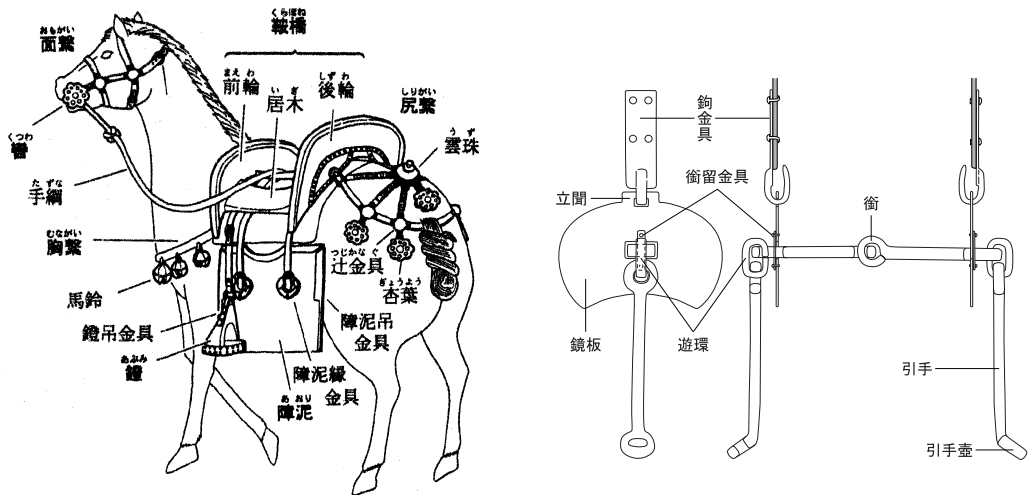
古墳時代の馬と馬具に関する研究には画期となったものが幾つもある。その中の一つに、かつて江上波夫氏が1948年に岡正雄氏、八幡一郎氏、石田栄一郎氏らとの座談会で提唱し、一世風靡した「騎馬民族征服王朝説」がある。江上説を要約すると、東北アジアの騎馬遊牧民が朝鮮半島を南下、北九州に入り勢力を蓄えた後、前期前方後円墳を築いた畿内の勢力を打倒、新王朝を建てたというものであった（江上1967）。江上説は古墳時代前期から中期になり、古墳副葬品の内容がそれまでの鏡など青銅製品や石製品に象徴される呪術的な性格から、武器・武具や馬具などといった鉄製品を中心とした武人的性格をもったものへと変化することの理由として魅力的であったことから、戦後間もなく発表されると学会に大きな衝撃を与えた。なるほど確かに古墳時代中期になると古墳副葬品に武器、武具や馬具が加わる。墓制以外の日常生活においては、鉄器の大幅な増加、須恵器の生産、一部の集落ではカマド付住居の採用などといった新出要素を見ることができる。しかし、例えば土器様式が一変、カマド付住居が短期間のうちに多数を占める、伝統に無い風習が日本列島の広範囲で一般化、などといった急激な変化は確認できない。一方、墓制についても騎馬遊牧民特有の積石塚は造られる地域が限定的かつ小規模の積石塚が多数を占め、



第1図 対象とする主な古墳・遺跡の位置

有力者の墳墓には前期から引き続き前方後円墳が採用された。結局、江上説は継続的な賛同を得ることなく、かえって自身の説を否定する研究が次々と提示されることとなった。ただし、江上説が無価値であるかと言えばそうではなく、戦後の古墳時代馬具研究を大きく発展させる契機となったことは間違いない。そのような意味においては、学史的に非常に重要な画期となったと言えるであろう。

江上説への最初の大きな反論は、小林行雄氏の「上代日本における乗馬の風習」と、これを受けるかたちで発表された小野山節氏の「馬具と乗馬の風習 半島経営の盛衰」である（小林1951、小野山1959）。日本列島における騎馬文化導入の要因となった出来事について、小林行雄氏と小野山節氏はともに「大和政権の朝鮮半島における軍事活動」であるとした。江上説への反論から本格的に始まった日本列島における古墳時代馬具研究の結果、日本列島への本格的な騎馬文化導入の背景としては、中国における五胡十六国時代への突入と三燕の成立、そして高句麗の南下政策とこれによる朝鮮半島南部諸国・地域の動揺といった東北アジア各地で連動して起きた出来事が有力視されている。これらに端を発する波はやがて日本列島にも達することとなった。中国吉林省集安市のいわゆる好太王（広開土王）碑には4世紀末から5世紀初頭頃に高句麗と「倭人」が戦い、その結果「倭人」側が大敗したと推定される内容が刻まれている。5世紀以降、日本列島では古墳へ副葬される馬具の量や遺構から発見される馬歯・骨などの資料が次第に増加していくことから、本格的な騎馬文化の導入が始まったことが窺われる。



大谷編1996より引用・加工して使用

第2図 馬具の各部名称

ただし、規模の程度こそ不明であるが、実際の日本列島への騎馬文化導入は、現在のところ4世紀後半段階まで遡る可能性があることがわかっている。山梨県甲府市では桜井畑遺跡3号方形周溝墓、塩部遺跡3号方形周溝墓および4号方形周溝墓などで4世紀後半～5世紀前半の土師器と共伴する馬歯が出土しており、後者の3号方形周溝墓例については西本豊弘氏によって「働き盛りの大きな「良馬」が犠牲として殺された可能性が高い」と指摘されている（西本1996）。また、長野県長野市篠ノ井遺跡群からも4世紀後半の可能性のある馬骨が報告されている（西山・青木ほか1997）。ところで、群馬県藤岡市上栗須遺跡では、古墳の墳丘上に江戸時代の馬墓が設けられ、27頭分の馬遺体が検出されている。（群馬県埋蔵文化財調査事業団1989）。この事例では、陶磁器を共伴したため明確に時期が判明したが、古墳墳丘上やそのすぐ近傍に設けられた馬墓などの遺構には遺物を伴わない事例もしばしば見られ、馬歯・骨の時期については慎重な検討が必要である。

さて、甲府盆地や善光寺平における事例の時期が確実であるとすれば、両地域では4世紀後半には馬匹生産が開始されていた可能性が考えられる。ただし、管見では両地域とも発見された馬歯・骨と同時期の馬具は現在のところ確認できず、最も古いもので5世紀後半頃の甲府市甲斐茶塚古墳例や、長野市地附山古墳群上池ノ平5号墳例などの鑣轡を中心とした馬具が挙げられる程度である。このことから、両地域では4世紀後半に馬匹生産が開始されていたとしても、それは大規模かつ長期間継続して行われたものではなかったと見られる⁽¹⁾。ほかに奈良県桜井市箸墓古墳周溝から木製輪鐙が出土しており、共伴する土器から4世紀後半の年代が与えられている。いずれにしても点として確認されているものが多く、面としての広がりや継続して馬匹生産が行われた痕跡は確認できない。日本列島における最古段階の本格的な馬匹生産の事例は、5世紀の前半から渡来人あるいはその流れにある集団を成員に含めた集落を形成し始める大阪府四条畷市部屋北遺跡など、河内湖周辺において確認できる。その後、馬匹生産はそれほど長い時間差も無く、東日本でも開始されたことが長野県飯田市を中心とするいわゆる伊那谷で確認できる。まずは日

本列島における初期馬具および葦屋北遺跡の概要、そして伊那谷、西毛、西遠江の馬具導入期の様相を確認する。伊那谷、西毛、西遠江を対象とする理由は、古代における牧に比定される地域が多く、また、古墳からの馬具出土量も非常に多いことから研究対象に適していることが挙げられる。また、これら3地域よりも時期は下るが、やはり一大馬匹生産地であったと推定される東北地方北部および末期古墳出土馬具についても若干触れる。東北地方北部における馬匹生産や末期古墳出土馬具に関する考古学的研究は古墳時代のそれよりも活発に行われているとは言えず、今回は今後のための足掛かりとしたい。なお、地名については便宜的に旧国名と現在の地名を使い分ける。

2. 日本列島における初期馬具と本格的な馬匹生産の開始

a. 日本列島最初期段階の馬具

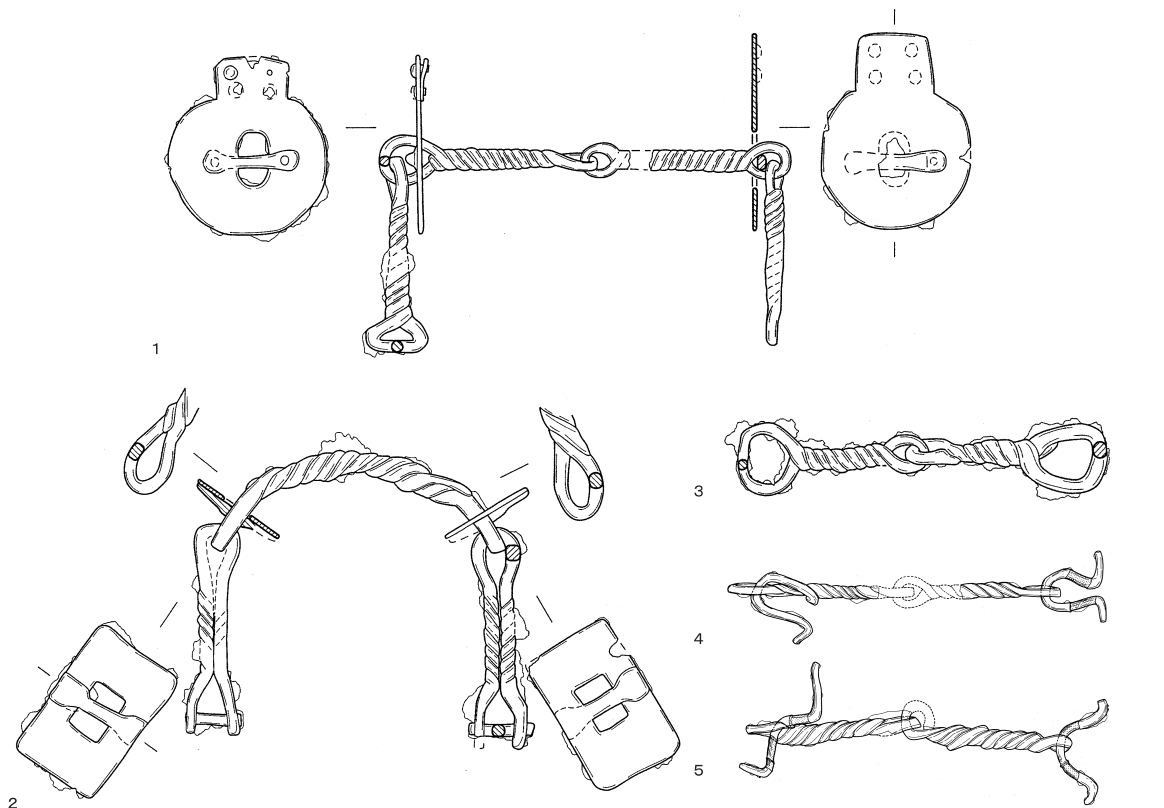
日本列島での本格的な馬匹生産開始前に少数ながら古墳への馬具副葬の事例を確認することができる。その代表的な事例として、兵庫県加古川市行者塚古墳例と福岡県朝倉市池の上6号墳例が挙げられる。

行者塚古墳から出土した馬具は円形鏡板付轡（1号轡）、長方形鏡板付轡（2号轡）、鑣轡（3号轡）の3点で、鞍や鐙といった他の馬具は共伴していないようである（加古川市教育委員会1997）。3点の轡のうち、類例が豊富な円形鏡板付轡について取り上げると、安陽孝民屯154号墓例、集安七星山96号墓例、慶州月城路カー13号墳例、金海大成洞41号墳例、馬山縣洞43号土壙墓例など東北アジア各地で類例が確認でき、日本列島では大阪府藤井寺市鞍塚古墳例などが挙げられる。さらに、行者塚古墳例とは引手の構造が異なる二條線引手をもつ宮城県角田市吉ノ内1号墳例やスコップ柄状引手をもつ金海大成洞57号墳例などの事例も確認できる。やや装飾的なものとしては長野県上田市鳥羽山洞窟例がある。これらの事例のうち、鳥羽山洞窟例や吉ノ内1号墳例は5世紀前半頃まで遡る可能性があり、日本列島への馬具導入から比較的早い段階で東日本にもたらされたものとして注目できる。このほか、馬具として伝わっていない可能性があるものの、北海道余市郡余市町大川遺跡では続縄文文化期のGP96土壙墓から鉄製楕円形鏡板が1枚出土している。銜留金具自体は遺存していないものの、銜留金具が取り付けられていたと思われる部分に穿たれた2つの孔から、かつては横方向に銜留金具が取り付けられていたことがわかる。GP96土壙墓例では鏡板の周辺から玉類がまとまって出土していることから、装身具的性格を持っていた可能性が指摘されている（日高2003）。これらのことから、日本列島への騎馬文化導入は西日本から東日本へ波紋状に拡散した、という見方について再考する必要性が生じてきている。すなわち、一定の時間幅をもって北部九州や畿内を介して各地へ拡がった後に東北へ、という波紋状の拡がり方では理解しにくい事例が見受けられるのである。吉ノ内1号墳例や大川遺跡GP96土壙墓のように、その地域での騎馬文化の浸透や継続性はともかく、面としての拡がりではなく点として突如出現する孤立した存在については注意が必要である。

池の上6号墳からは2点の鑣轡と鉄地金銅張の鞍金具などが出土している。鑣轡とともに鉄棒を振って製作された鑣轡で、いわゆる「多條振り」技法によって製作されており、行者塚古墳3

号轡と同様に引手をともなわない構造である。銜外環には立間の役割を持つΩ字形金具が取り付けられる。池の上6号墳例のような振りのある銜や引手は「鍛接技術を用いずに丈夫な環部を両側に作る」ための技法である。この技法については、最近では諫早直人氏によって詳しくまとめられており、大きな成果を挙げている（諫早2012）。

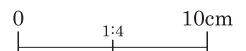
行者塚古墳例と池の上6号墳例はともに4世紀後半から末ごろの年代が想定されているが、この段階における馬具はあくまでも点として孤立的に存在するのみで、そこから日本列島での本格的な乗馬の風習や馬匹生産の開始を積極的に認めることはできない。なぜならば、古墳副葬品に馬具が含まれる場合、それが被葬者（あるいはその近親者など）の持ち物であり、被葬者に乗馬の風習があった可能性を読み取ることはできるものの、被葬者以外の他の人々にも乗馬の風習があったかどうかまではわからず、場合によっては鈴のみで轡など他の馬具が含まれない事例など、被葬者に確実に乗馬の風習があったとは言えない場合があるからである。言うまでもなく、馬匹生産の有無について積極的に語る材料にはならない⁽²⁾。すなわち、本格的な馬匹生産が行われていたことを確認するためには、乗馬の風習の可能性を示す古墳に副葬された馬具とともに、集落・生産遺跡といった実際の日常生活からの考古学的かつ科学的な証明が必要となる。現時点におけ



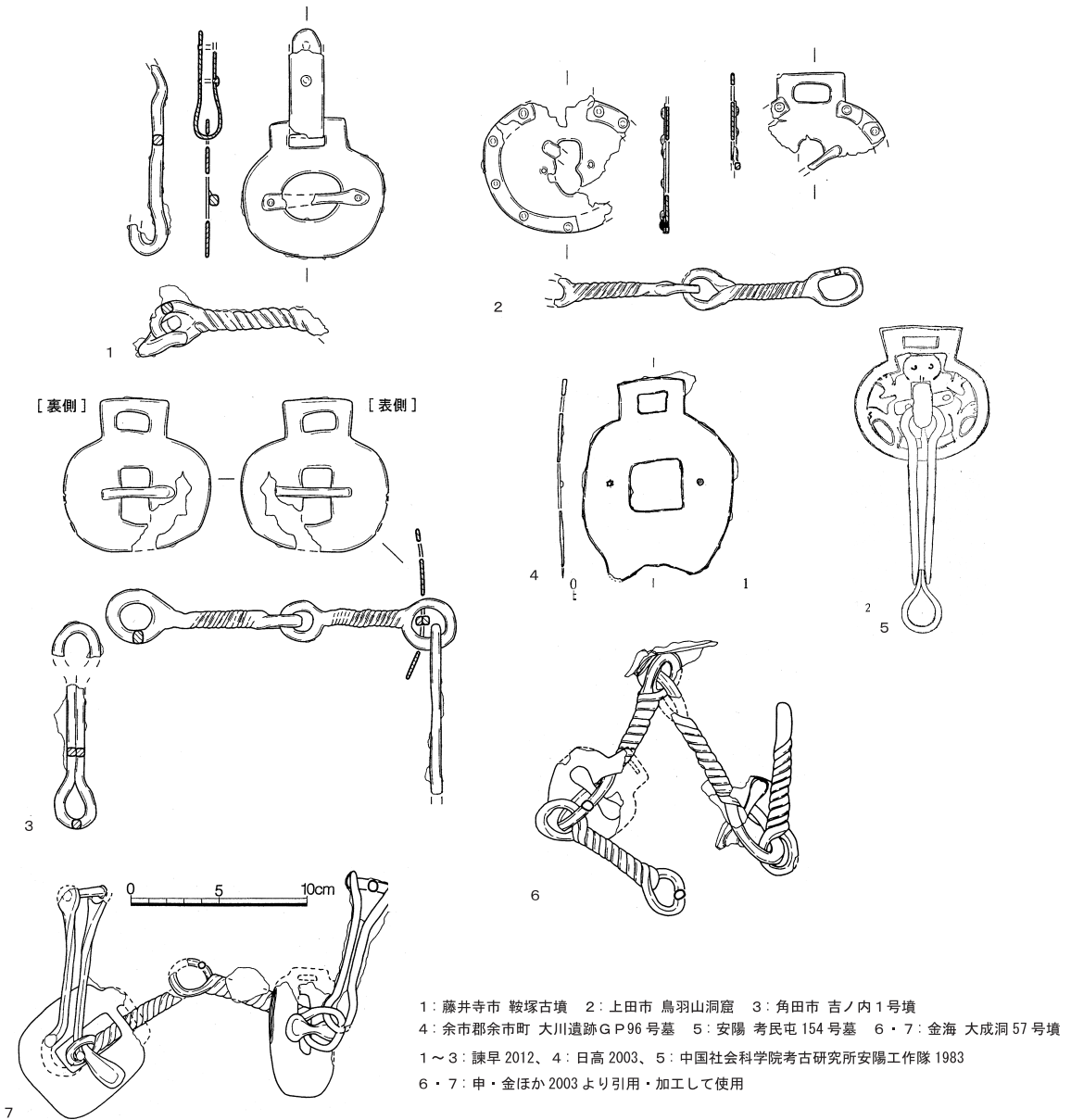
1～3：行者塚古墳、4・5：池の上6号墳

1～3：諫早2012、4・5：橋口1979より引用・加工して使用

第3図 加古川市行者塚古墳・朝倉市池の上6号墳出土の轡



るこの条件を満たす最古段階の事例が葎屋北遺跡である。

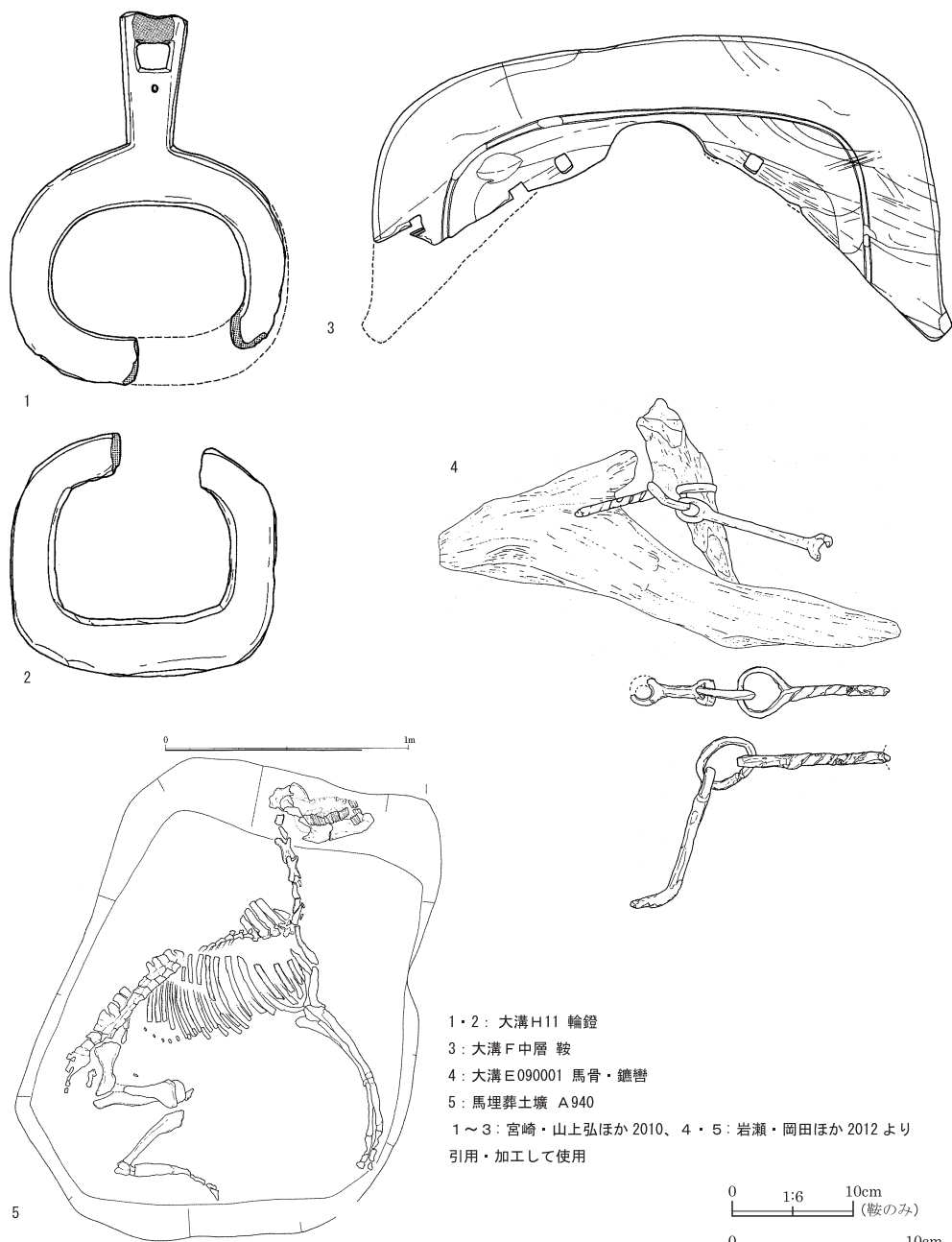


第4図 円形鏡板付轡の諸例

b. 葎屋北遺跡と本格的な馬匹生産の開始

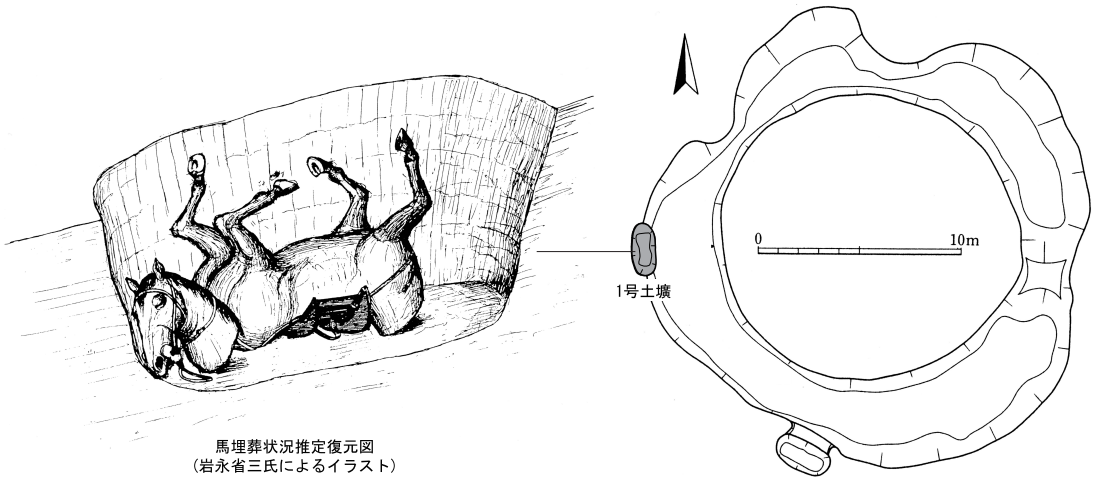
葎屋北遺跡は大阪府四条畷市に位置し、北に讃良川、南に岡部川、西に河内湖、東に生駒山麓と、天然の柵に囲われている。葎屋北遺跡では集落内の大溝の中層から鉄製鑣轡、木製輪鏡、木製鞍が出土しており、これらの馬具については共伴遺物から上限を5世紀前半、下限を5世紀中葉に求めることができる。また、集落内では全身骨格がほぼ遺存する馬墓や、馬の飼育に必要な

塩を生産する多量の製塩土器も出土している。轡、鏡、鞍という乗馬に必要な馬具がそろっていること、大量の塩を必要としたこと、そして何よりも馬そのものが確認されていることから、ほぼ確実に5世紀前半から中葉には馬匹生産が開始されていたことがわかる。さらに、集落内には大壁建物が確認できるほか、遺物では陶質土器、軟質土器、移動式カマド、U字形土製品などが出土しており、馬埋葬の風習も見られることから、葦屋北遺跡の成員には渡来人あるいはその流



1・2：大溝H11 輪鍔
 3：大溝F中層 鞍
 4：大溝E090001 馬骨・鍔轡
 5：馬埋葬土壇 A940
 1～3：宮崎・山上弘ほか 2010、4・5：岩瀬・岡田ほか 2012 より
 引用・加工して使用

第5図 葦屋北遺跡出土馬具・馬遺体



馬埋葬状況推定復元図
(岩永省三氏によるイラスト)

千葉県佐倉市 大作31号墳 1号土壇 (藤崎・田島 1990より引用・加工して使用)

第6図 古墳にともなう馬墓の例

れをくむ集団が存在し、馬匹生産を担っていた可能性が極めて高い。渡来人の故地については、出土した鑣轡が銜と引手の連結に遊環を介する構造であることや多孔式甑など土器類の特徴から、朝鮮半島西南部との関連が指摘されている(岩瀬・岡田ほか2011、藤田2011など)。なお、葦屋北遺跡の周辺遺跡である奈良井遺跡からは馬の飼育道具である木製のブラシ柄と鞭が出土しており、葦屋北遺跡だけでなく河内湖周辺の一帯で馬匹生産が行われていたことを物語っている⁽³⁾。

ところで、5世紀前半ないし中頃の畿内およびその周辺では、大阪府羽曳野市菅田丸山古墳や滋賀県栗東市新開1号墳において金銅装馬具の副葬が認められ、鉄製馬具は大阪府羽曳野市鞍塚古墳、大阪府堺市七観古墳、奈良県奈良市ウワナベ5号墳などから出土している。5世紀の早い段階で既に金銅装馬具を副葬する古墳と鉄製馬具を副葬する古墳に分かれていることから、導入してから間もなく馬具の所持において何らかの区別が行われていたことがわかる。また、これら畿内およびその周辺の馬具の特徴を見ると、例えば新開1号墳例はX字形銜留金具の円形鏡板に遊環を介さず直接引手を連結する構造であり、鞍塚古墳例は鉄製円形鏡板に横方向の銜留金具を取り付け、振りのある銜と振りの無い二條線引手を直接連結する構造であると見られる。また、七観古墳例の轡は円環鏡板に逆T字形の銜留金具を取り付ける構造である。これらの古墳では木芯鉄板張輪鐙が共伴する事例も見られ、その多くが鐙の側面全体、あるいは鐙の柄部から輪部の上半部に鉄板を張る型式で、鐙の全体を鉄板で覆うものや、補強の鉄棒を備える型式のものは現在のところ確認できない。これらの馬具類は朝鮮半島東南部の特徴を備えるものが多く、特に鐙については、金海・陝川地域の型式をルーツとしつつも日本列島内、とりわけ畿内地域で生産された可能性が指摘されている(張2008)。このことから、5世紀前半段階の馬具については、垂飾付耳飾など他の朝鮮半島系遺物の様相も踏まえれば、多元的な入手・生産ルートが想定できる(高田1998)。